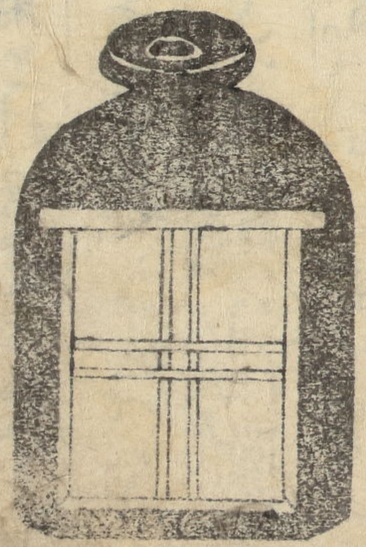
へ 13
2896

醒卓燈

得失榮枯總在天、
機關用盡也徒然、
人心不足鼠吞猫、
世事到頭猫捕犬、



硯窟共夢西窗燭
郡齋已山夜雨時

へ13
2896
門へ13
號2896
巻
昭和九年
七月三日
購求

復讎猫股屋鋪自序

唐乃高宗ハ后武昭儀妬で蕭淑妃を
殺し猫と鼠ハ武と蕭を化して
鼠ハ猫の為ニ製をつくりやさしべ猫と
鼠ハ陰獣にして溷悪を特狗ハ陽獣にて
剛ゆう艮の卦ニ象る那鬼と鯉乃化討ハ
迦痴羯山ニ来ふれど一番ゑ弱ろく
あるしく化を拋丈蓼乃作者とちゐを

髭束菅鼠の中ゝ下ニ徹まるやんどゑき
方の御伽菓子となりり猫ハ中金の
盆ゑきにあゞと犬奔の七志ゑがきふ猫ハ
ちよろひちよろと福鼠の上忠ゞ
ちう本と臣慶賀堂ニ壽ゝ辰乃春ゆ
新版とハなり来ゝ
丈ニ化を四の年如月ハ

中武蓋淺草乃隱士

振鷺亭主人

筆 戈金龍山下丸

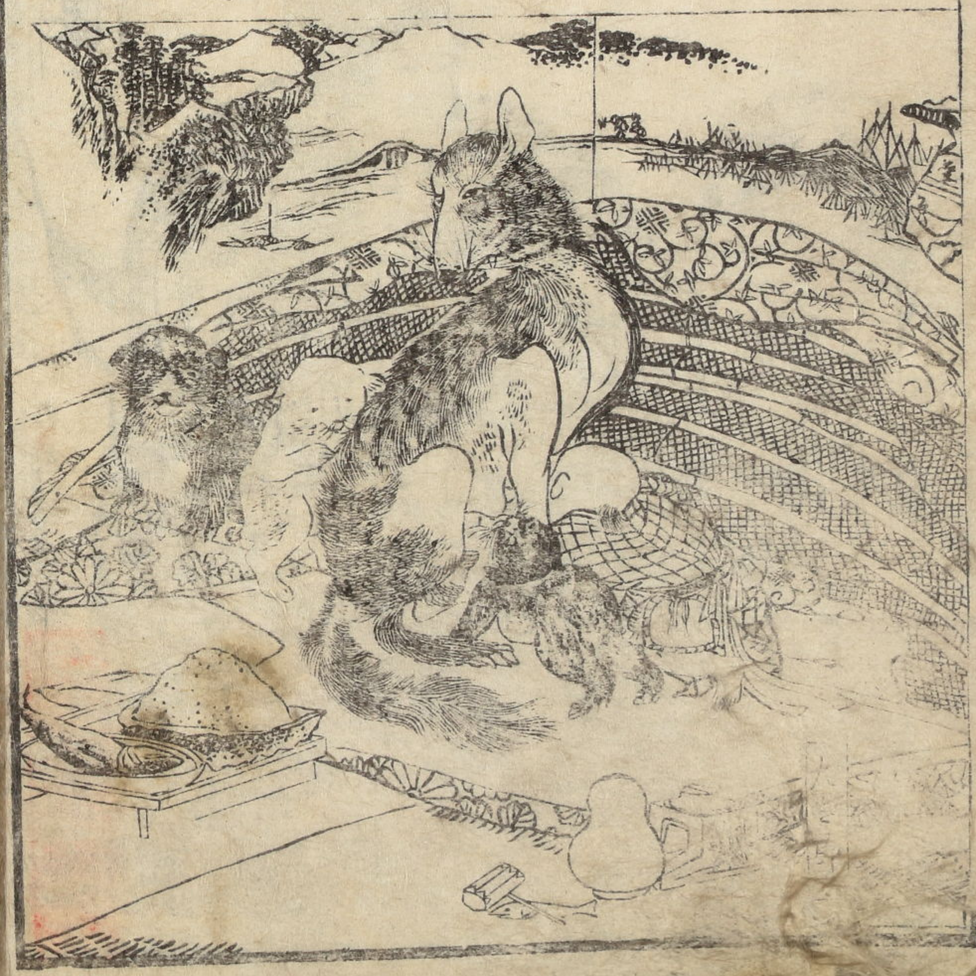
僑居ふ操る

八角犬太郎政昭像

爲人義撥
威風凜々
面色如玉
身長六尺
容貌魁偉
皮膚肥白
膽氣如烈
火時年紀
十有五歳

○犬の恩

難波の阪助孤子に手飼の犬を托して乳汁をふくめうせ佳食に與へてその恩を酬ひ遂に奇児犬右郎に生育するの圖



北方之魔神也恒
毘羯羅大將所降伏
鼠賊夜叉神之像

主夜
神咒曰
婆珊婆演
底
此咒ヲ唱レバ鼠賊
神障碍ヲナサズト云
盜賊鼠倫二
鼠ノ倫

猫乃怨仇
於讃州小豆島八角犬太郎討猫魔圖
奉讃州象頭山金毘羅大權現懸絵馬
東都蹄斎北馬畫

敵討描麈屋敷

振鷺亭主人 著

犬乃恩

高臺于外而見則煙起民之竈者贍爾兮里と仁德天皇の御製なり雄渡れ都へ往古より繁花の地とそもそも是なる處ふ掘出大坂長町のうち儒家より阪助とつくるものあり生涯篤実にして正直乃仁ゆゑ紙屑買ひて世の業とはして稼ふ和ろ
ゆゑ是とおくにあるゆゑ雇ひ主とおなじ
しゆ夫婦匿く匿る中に寓の出生懐妊し

殊更雑産ゆのぞき阪助も家業をやめて朝夕乃
仮家成業〳〵乃ゑび七夜のうちなぐるも紙屑買ゆゑ
出ふる嘉い夫の為成行俺〻ゑ〻ゑ〻細く
我身の悩よりとくゝゑしきものかぎゝゑ川庵
赤子を抱き抱き乳の為搦ふうきゝゝと腰ゆゑ
雑ゆん紀〻と撞道をものあり毎夜初心ゆゑ
さの声ゆゑ道ゑる声〻我兵を見よやゝゝとゆゑ見成
道乃ゆゑいゑゆ日乃可笑ゆる三毛猫その夫
五尺棒とゆりてをゝくゝゑ〻ゑ〻ゝが尾へ二股ゆ割ゑる
成閃〻口耳のもとまで袈裟碧玉のごき眼を怒〻てたゝと

脇法師ゑゑ〻ゑ〻ゝ〻ゑ〻ゑ一目見るより咽とゝて際へ
なぐるも外面の立逃出んと迯出ん處成体の猫ゑゑ毛
ぶ喉咽ゆ噛ゝゝゑ〻ゑ〻一口ゆ噛〻教〻ゆ成附ゑゑ〻ゑ
乃者ども為ゆ揚ゆ出乃為ゆ立ゆ誰ゆ知ゑ〻ゑ〻ゑ
なゑけ乃夫阪助も彩とゆ神ゑゑ紙屑買ゆ出ゑゑど
毒ぶ彩〻ゑ何ゑゑゑく我家のゆ社業ゑ〻ゑ〻ゑ
ゑく立ゑ乃ゑ為ゆ嘉い血ゆ深て歩例ゑ由ゑゑ〻ゑ
いゑゆゑゑゑゑや喉咽い剥ゑれゑゑ〻ゑなゑ〻ゑ何
ゑい息のゑゑべきゑゑ〻ゑ〻ゑ紀腰をゑゑゑ阪助
ま狂乱のゑゑ立川居つ成閃〻血骨体ゆ

徹て歎きるゞ理なり扨儲蓄のそなども集まて
さゝぐ会議をまども何者の所為とも知まゞく
見へむ為まるの妻恋を求のたのまゝとゝまゝ
阪助をいさ免書の亡骸ハその夜千日小墓ゝく
妻恋乃淵とゝまゝ阪助ハ書小日まま
しゝハ急ちひゝゝ心かそきを身とゝゝ七夜の暁び
引ゝく初七日の逮夜とゝゝ事れども乳吸ま
ふゝまて堪ゝかせぎにも出ざまべそや一結乃
鶴もつきて伝をれよ供ぶ涙もなく我乳
の長ハさるまゝゝゝまハ乳ふとまゝ痩かそゝ

貧夜なゝまゝまにや母ざまべそのいちじさ親の身
ふとまていゝだゝなん阪助稚ふ垂言ハゝゝ
狐ども我子の乳ふ吸る式見ゝくハ胸を裂ゝを
あゝへさく孫ま血の涙をなじゝの筵畳の雑ふ
の雑を蒲む風情まてあ見れたかまきまさ母なゝ
さても又阪助ハ日ゝゝ班の犬式狐化事しが
何にゝ式自分の食物を日事てあゝへ猪の外
ふゝむんゝゝまハ彼犬ハ尾式ゝさて阪助が
出入を慕ひ金長門口式たまびしく年ゝゝ
長なゝゝさ巳ゝ式かゝどゝ乃ゝゝまゝ事ハ生ハ

陸奥のくにとかの国びんの郡ひ我家の樓の下よ
入来るみ仏大書のお亜と同日に産しるを
御るし陸助が書へみ名ゐ大へやをくと樓
の下よそうゝ和とし七八隻のるたみ乳をゐくま
をるをさ名成陸助はくぐと足母色が頻みうら
やましくなりて大よ射て云るへ班よ偽がるへ乳
ありて去あるせ名是ども我るを足よ嫩へ北業み死
て乳よむ名是那此よ度かそうゑれと我身色く
しくさとるれ母べきるへさて和き物あゝく迫迫み
乳をりしゑぢき物をなる是べ今へ足だ色にする

よ足外なく我をかせどよ出ずしてかくてへ仰て死ね
ぢきゐう我死なるへいとも和ともいうみしても我るを母
びんゐうさうとて諸会をぎれ和をなく年久しく
仰ねる三毛猫さ（我愛しきを足ゐりて伝の地ゐん
新もなし）妹よ猫へ三年仰是くゝで三日のおん
と知大へ三日仰是て三年のおんをるとむゝし
ゐう云偽されべ大へ義成まるりのぞとよ猫よ保
と我とへ名ぢ久しき別深そ我るんのドまるを
へべ別我家乃者なりいゝみ世つ我をすゑと
色ひて一つの孫をかゐ名へ是まきゝきゆと真実ふいひ

見べ彼大會始めてこれを知るとそこの所を
強しられば阪助さてハ実ハ其一さ見て
家を捨る多地成者ハ親子の情をこの
とらくべいるおの見が乳を我子ハ欲せく見まじき
やさそれべ我子もおいこの方ぞく我をかせぎよ出ね
べ親子ハ家命をもせぎよりのるく深よ
命の大恩なるぞよとこれ人間ハ語るがごく
もこそら憑くとく涙とともに合せ見見
べ彼大畜生ハとくぞ阪助が感激の工ぞ成
なる者さてこん乳よすぐねこるこをおし

たるく撥の下成たい出しがやそのかくと愛乃
よあぐりそのほく森子の懐にかりて横ハ所をこ
そのさ面恒よ乳成ふく色よといたねむりのあり
さまなる見べ阪助さてこれとひ泣ハる我子をさし
出しこの乳嬉にあてそこよるへ怒ち泣やこく
すらくと乳汁を吸ハるぞ赤ハき阪助くる
殊勝のこさ面をこて合さく赤吳のこひをこつ見
ぞも明るのこよを語くぞやうををたこ見るハ毛日
こて彼大ハるひるとなく時く様のハりたひ
出くかこ乃ぞく乳を含るこさらハ人間の母るこ

美なるこざるとべ阪助一限の若男を体めて大ひよ喜
ぶべ理なりかくて年月あまりもこるゆある日樹の下
蔭よりこぐくるこだもおびてちく法味ぶそのこを
見ゆるりて何ゆまとと阪助様の下をこやりるり
彼犬七八隻のるなを出ぶ嘔こ臣ろり阪助大ひよ
呆たてくるるるよ彼犬つくくと雲のようあるり阪助が
るよ乳をふく臣がいろみるりてあ去ひこ首を抜こ
てぞねう阪助云恩のるをるるよと吃つも何
ゆくよりおのこがるを嘔こ臣ろん畜生のあさ臣さと
とひねるふそのの時ようてや様の下よるり川と入ぶ

ざるあれべ阪助心づきぬるへ抜へ乳母そうて肩蔦る
ゆくおのこがるを成教して我るをたをんとする心ゆや
さてもく人間の恩愛とそも及べらべそ感涙をるぐく
犬ゆ恩義を愛く謝しかきは臣るるるなへ蓋抜ゆ
のるゆ藥をぬ清し後へ彼犬昼夜つきそひて他
ゆ乳母のこくにくづきこここべるゆるゆ母のこひるや
乳嬢をふくんでむぬく膝を或へ遊戯なとしく
世も法のるるうここべ阪助今へ多人のこひを臣、持る
をたゆあづあおきぬるく低屠買まで出よるるるも
知なる附へるるこるのむそよそ犬の首を極さそ

是戻りまへ給き奥を買来りて彼六を乳を養
とるの鉢ゝ〳〵ぎまるる実や嬰児の生長するの日
月と共ゝ日〳〵七月のなぎずく這ずどれるの八月と
さち九月よりなりぬ是だをたや乳なきとくも
鬚あぐるどく阪助弥んをやをえくおりやう
去是とゝもだ乃大恩我るの為ゝ是べいにも
して食物余りやうゝと日夜勝とくども急よ
角ゝまゝ是合せあゝくある日大坂中をまより
く豊の屠をも買出さど暮山及て新藤乃
五高町武通りるゝ熟ゝく他なゝ

家の内より是若侍を出ゝく紙屑や壹やるべゝと
いゝよ阪助そのまく三十二文ゝ伴の紙くず武
買をりその日八色武張りとゝく我家まそ迄是
さりしがまづの紙屑なぐゝきらぐゝる中より何
やゝん文古ゝ法をさるゝの出ゝり阪助つゝを
紙ゝく開きゝ是るゝ元十両の金ゝゝ是ゝ阪助
ゝゝ是ゝいゝゝと肝を潰して大ゝ果ゝてしゝゝえ来
正実無恐のそ乃ゝ是べゝ家師ゝゝとひて振ひ出ゝし
色へゝの侍開しきに元ゝまぎれ武金ゝを紙屑の中ゝ
まぎ是ゝ是せゝりのゝんゝ是人の金ゝゝなどゝゝく

紛矣なりしるゆゑばかりの侍いかでかは義やさることん
伝いとまあまうくる大金を我身おもて面相なさで
人の怒ひくまて陵辱の経もそうぐ迷さてべ所
附もまあ〻なすと迷と伴の金子をえ乃まおとく
紙屑の中に入〻急ぎ五高早社の家を到を
見届べたや明家となりさて阪助あざ富
ちひ陸の家〻〻実ふの家ハ貧窮敷ものあとの
月より武家方とたく〻旗富ふ侍〻ましが俄ま
今日引もひて家紋いさされさりて西国方乃
侍荒とむりまて名をもあ紙を乗りひとずと

いふ阪助いよ〻騒ま之の金子を持あ〻し法く
こというぐせでやとたひ見ぐむるが冊五高早す
鼠を治といくるものあり人〻鼠の妖術を使ふと
いふ迷ひく鼠と綽号せて何の河紀といふ
もなく科をむさがまて人乃証人なとれ方ふ
をなしまべ留て阪助源者ふハなれとも家
成借る附証人ふ憑〻ふりの名ま べ先ま治ふ使り
く拒絶せでやと之考ふおまよく思治家ふ
あませて阪助が去りくのもりぐまを実く思治
云るハ之まハたひがあざる仕合ふ聖人も天乃

嘆くるをそらざるべ都て罷せずとらくべ千金ハ
西はとして世をくるるをうさして大金
とらくるあるべ日の法あるべとて何かどの
ゆあるん我よきやうみ計らちんほどにうるべ人
みなるべ阪助色法ゲエいをとにの
さるとも思くども狂心易くずして色法人なる
なとへ申せしうど後の為なるべ法まで進陣の
人みハ語をあくどしと思ひ塗どなるを一人住
る願西とゝるべ者の表よ立ち併のあり
やう我なるをるべ弱西ゆくあるひ金を拾て

さのゝ若者のゆれもあるべ福どこ出一遍のゝうち
天道我為をさるゆそ色されべとて千金の
を西国方乃侍とでうみていづくをあてよ為ゆ
れもちりちんやうもなし都て色より為来べ
きさなるべ先いづれも千金子ハ人のゝつゝ
ざるやうみ侍檀のうちにとくと收おきて法ゝと
申けるべ阪助ハ金子を推くゝ表に為ゝ西
がゝ表えのごく金子我仏檀のうちみおさ色金
しゝどあるゝまゝなき金の番人やとて夜ハ心の
愁となるて為ゆむをだす為をく記出るあよ

うの五右衛門の証人を作業いうや阪助金を
拾ひくいうくろ〻都なる可哀さよと思はさて
おき我亡父の年回ふあさて思べんだうの童
のうちをこらしとて一室の牡丹勝を偽物と
して無へ作そろくよかさて又外ミへとてぞ出
ゆきる阪助へまづ出ばがあさへ牡丹勝をれ
擅をなくつうの金をうを有指出んもきを
あーく又ぶーおうんもんぐを軽まいてそるた
如来なりと一ん長じるへ我金を盗ろく
をおーむふへあぐ思ぐど今れも指白に出金せ

ん附償うへもの力なる事れば忘とんふ翁白の要心
金るの当獲加護せるへと長じあるりて拙
を出んとしさまーふるの大阪助が据をくるく
ろ〻出き里ふ引ろで免るを思べ阪助はやうをとを
ていろうりあ志思を思てるゆいはさていんあーきろ
我も家にありうを元をのなれどもさるふろくた
今日を送をかねるなるようくなるふい小夏を
買てきてさびてんかーうをの仏擅ふへ金るあを一べ
翁白の戸よ婆人の用んうを思ぐるたのむなる
とろく那ろを出んーけるふいう出まん天秤ふ

流と中より出れバ何となくゝ里の首途まで
後乃あたれと志らず紙の恩を反古の買出し
み荷を引搖てゞ出ぬるゝ

○鼠の偷

長ゝ隣家乃願西ハ元来亡賴の惡徒なりるゞ
強ち耳をつまて阪助ゞ今つゞやきし実を
るその間を見こゝ表の戸ハ鍵あれバおのゞ様乃
下ゝぐまり入庫下を見びやゝもつてひて阪助ゞ
狂居の内よりひ出し処ゝの犬ハ見る乳を含
えて騒ゝるゞ西ゞ怪しきこゝを見るより吼

えける為ゝ西人や知る場なゝ畜生めと
謗つゝ擅を見れバ牡丹猴成徒てゝ居ゝ見れ
ゝ口ゞを見ゝとらするとゝく牡丹猴を奪ゝ
ゝの犬ハ見向ゝやゝいよ〳〵吼暴る西ハ絃
金子乃賊布を首ゝ巻ゝ出さゝバ我を相待
せんとて牡丹猴成一口ゝ喰ひ駆ゝ様の下ゝ逃
入ゝとゝる犬をゝの犬吼怒て表ゝ里ゝ迄
西志や畜生めと背ゝ拵刀を抜て追
一突ゝ突ゝ迄バ犬ハ胴腹を突ぬゝ一声呼び
叫ゝ変ゝ犯して西哈ゝと歩ひ出の迄

牡丹猴とくらべあらそひ命を捨つるよ我又究
一のくふどしとゝの牡丹猴をとりてくひるゞ怠ち
口中くゝ鼠血稀おく遥ひて牡丹猴を生ず
吐出し五臓廉ひて赤色ゝ変もそず色ぐ
目を白く色ひくなし七鳥八側してのさうちゝ
死とひ若しゝ死ゝ死ゝ自業自滅乃
報を怖しき代日阪助ハ英雄なるゝ我が
家ゝ物ゝ以児の悟有とき嘴色ゝ伝ゝ
急ぎ戸を引明くゝ見て彼西ハ血を吐く死
犬ハ突殺き見苦ゝ見ゝ見て阪助

大ゝ猿きもハ大ゝ驚くゝと騒ぎるゝ和藤
乃者ども弛集ゝ出ゝ見ゝ見て彼西ハ阪助
ゞ石拾の食残布成ゝ見て知ゝ見ゝ
なく貪ふハゝるゝきゝ陸ゝ犬ハ吼ゝ切て見
きれゝるゝ和遠なくきゝ見ゝ彼西ゞ牡丹猴和
喰ひ血を吐て死ゝ見ゝ見ゝ犬牡丹猴ゝハ色く
犬毒を入おきしと見ゝ何ゝ牡丹猴ゝ子細
あゝ免と金議ゝ見ゝ犬牡丹猴ハ今朝五ゝ
町の名治ゞ拾集ゝ見ゝ阪助を毒猴ゝて殺
阪助ゞ為ゝハ藤家の誣人なゝバ家財金ゝ

みちのゞ方みゝ引ゝ死べきもの治ゞ巧と知ゝて立さゝべ鼠
治を捕来ゝんとて江五人の壮者ども五高町ゝ
到ゝるゞ引ゝ立みゞするゝやと表ゝる ゝ心ゝ
先治の来なゝく一人内みへゝ治用ゝゝあゝ表
とてゝを引ゝ立ゝを治ゝ始ゝゝとてゝ立ゝ
ゝゝゝ一人ゝと考て後抱ゝ立ゝと引組搦制
きんとゝ又一人足を捉ゝ引倒さんとゝゝゝゝ
不思議や治ゞその髏綱乃ごゝすらゝゝと
脱出てゝゝと柱を負ゝ栖ゝゝゝて表
急ちかき消ごゝ矣みけりゝゝまゝいゝと悔ゝ

悔くゝで茫然と果ゝて外面ゝ心ゝ者ゝ表
ゝり戸を引立ゝ見みゞゝゝゝ逃出ゝんと高欄ゝ
ゝゝゝ略石の下乃ゝゝ鼠出ゝ逃ゝゝ人
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ治鼠の加御を使ふゝ
ゝゝゝ形の御ゝて人乃眼をゝゝ逐電ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
治と於西ゞ惡事かゝくまなゝゝゝゝ
きゝハなゝり寺院陰ゝゝゝゝゝゝ
櫫なゝきゝて太乃死髏をバ擅形寺ゝ遣ゝゝ
前頃堰ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

最愛なる男子を別れてより大ひみを為世
うど思ぎるにあはせや乳わいまで日を隔し生長
て名をも太右衛と号さしみえ来陽数乃乳
汁成脱れる以まや精家選しくあひさちて紙も
七歳ものなりふけり阪女我児ハ健に生長うど
こを見通多名とをくを見藤志ぞ見て乾附
自由なるずおの性うを世の愛をなりぐくしく
通る親子人の門を立くつ通色おびこうる
多るものども阪女ゞ行行奇かなひぐきを初お
の太右衛孝行に父を抱なつるをあを見

て猿引車成手らくあるこれ見ば太右衛これ
らを見て父を車にのせて大坂乃街巷成裏ありき
性ゝ節毎りふ表弘和をうひ或ハ住吉海乃を
栖としてゆきて乃人ま紙を乞ものあるを太右良
見みハ盥漱成塵へどる目秀眉清るして多見
拭ゝば色あくまで白く玉を敷く容貌ま れば
見る人竜を見て恍惚となりて一端二端の好
効せざるものハなるそのゝ物行若浦乃
の紙を車とて人とあてる強ハその日ハ糧
にあ多ず阪女なるく乗倦若のをひをなしく

所ハ非人それども伝に云ふ所ども如ク風
乃ん地より次第に重き湯あをぐ出きていまだ
今ハこのすくなくなくまんく年月ハ陸奥太郎ハ
むろひ城をなげてゆるハ我もとや世度が
助命と云なれバ猛ふ申ハくるあり伝が
母ハ産あとすと耶附ふ伝の者と為まさ教害ふ
あふてまくなき宿命をしとあ伝ふ伝ふ
いろいろりて生長なさぐ敵を討て復讐の
妄想成さらさす巳二の日ハ我ハ指ふ一法ふ
十面の食ふを作ふあづくるなり巳食ふを

えより我食ふにあらぐ白ハ誰とも云ねども
包乃反吉ふ徴見宮川郡小夏為と書法事
あり伝ふ法成ふぐ里として徴彼ふぐ食ふ
乃主を為出し世食ふを送ふ世ふしくまふさ
それバ我ふ業のかぎふての喜び巳ふくやある
巳き巳食ふハ人乃空とぞ思ひ世年月傳ふ
奚若ふ世ふ里を投首成猛て死なんとまで
思ひ法ふる時ぐにもふをつまずしくかく
非人となるきまでもふく敬ふあ巳なり
今巳食ふまく大人ふ参を用ひなバふ一

たるものもあるべからざるに、我命ひろうても此金の
を持ちゐる道をあるべき為金なればかゝる又が
本意をなすべき事なれとど語りなれば太なる
はるべく学て母の他ハ天の昇を此我ごとてそ
暮世て本望を遂しゆきさんがこで悲しきハ又の
病ひなり後会なるべ以金もせよ命まうる空や
あるん何とぞ金を人参代る点都て今一度
本復なるべき我身を世ばいうなる
親孝をもいとそ幸き若をなるべ十両の金
をべ償ひ手ゐるゐ医まいるべ天ゐを此ゐる

をとりの又みたゐ且生べ我身ハ誰をゐるなる
ゆくゐやと涙をそらくとなるべて中ゐ且ば阪ゐ
以ての外ゐ服医作さるのゐ早婆みきん底ゐ
てハ欲を討ゐも是来ゐ又金ゐを何とゐてん
我生涯かをそわれも非乃路をゐこで且ば又て生
かく路路ゐさゐとも紀をるとも天道憐ゐひてゐ孫ハ
ゐゐず業ゐなる医作ゐ和ゐて人の物をむさがらん
あるべゐとくゐ且べと教訓ゐて且ば太ゐ良ハ
唱て歩出ゐ且法都をゐ生べとさべ延命数と
そのく来やてまいゐ医とゐて法ゐ出ゐるべ長

ある阪西にろう者を送りて今生の別れをし
親子の名残おしまれて悲歎の涙ふるいかかるに八
や犬を部屋にとりの親子なれば乃のかさるる病床
てり犬るや嘆息やすんさをなげく犬を良が孝心
天ふぎきゆくさき犬をせめん我へたや定命
などの薬をて石塗いきのぶだき命とも思へず
なりく死病とひあきめられば犬を部屋もなく
若男ときせ乃宗麿のくるとせんとりハ一刻も
そやく往生を遂ばしと思て意脈へかりながらも
我るの輪廻にむくされておくるを観念しつ

十六

孫ふ舌を噛てぞ死るハ哀かをしるもかり犬を良ハ
新ことをすず急ぎ薬茶をして地をるる犬が完
弱乃有さ様をして何ハ鍼ざんをや来きれるを
見く天ふ焦れ地る叫て親へいをん家をなく国も
あてく是ぬ次身ある居しるバ近辺のものも犬を良を
なぐさすを犬が死髑髏をバ大坂の檀那ふあるや
ふ犬を部屋なりくも聖をの送をの哀をバ見聞人
若ふあを是とりしをけを粤ふ一個の武士犬を良が
名人を鑒定して良人を取参しが第ある仏世
泉路塊るかく是ふき萬人歔見龍と号る云法

者の家を奉仕させるる大石良氏家の七度参り
勤仕私なく豊の暇あれば寝食忘れて日夜
忠節怠なく怠りなれば天性の才覚を発し
百折ふ磨の粥をぬり奥義ふきうる大石郎を賞
てやるへと且一隻の大石勢れ太刀角八方を元
圍まてる時雙眼を配り敵ふもくひ紀の形成
構ふる光景なりくに方八方ふ豊の間もなきとの
ふく石法の妙ふてはあり大石郎が精神ふのふ
ふ比ふく名詮自性の理をなれば仮業八角太良
と名のるべしとて続ふ十五歳の春ふ一流の秘伝を

授ずず授ず印可をゆるされ知ぶ方ふ名ふ
強ふ方ふ大良ふ強ふ夜の夢ふ又の陰ふ眼ふ奥の波
をそそぎ怒の面色をそなえ保ちや十五才にもなりけれ
ば母の敵をも討ぞ会ふをもいまぞ仇きをしく
父が妻孤と名まりやくに国ふ渡て大を武道
道と名て美さ免ぬ大石郎ふ勇きけふを武
十五才にも及びて父母の宿願を遂せざれば大丈夫
のかを面ふあるべと見ふ彩ふ密を若て暇を
乞俄ふ旅装し美乃若ふまを出て国遍路と
造伊の江の浦ふ渡船て出て国ふ来も方ふ渡の旅路ふ

こそい新なる淡路島の傍を過て
頃磨や明石潟波の枕なうつるを敵るあさぢ夫物
の浦和田の岬備の田くさきにいろ中を過
なべ暮るゑぐきれ灘かなやなるも宮祢の浦風る
苫帆の追風を目敢て淡彼の玉先磯の港なぞ
思ひるかくて夫を南へ舵をあげてまぐ象形山
ゆ新宿ー昆比羅大権現を祈参して一のみた
敬のゆ来を暮んあ二のまいろの食なの生を暮なな
云のみへ又母美提の名田山為んとと志ーを歩て武
淡裏へ部流大師誕生の地なバ玉中祢るくま

かく回を七里より伊予上佐備後の果場を意く
順礼ーて国遍路を歩納しるぎも遂ゆ敬ひもめゲ
あさずして年言なくも生ろう俵米の玉児侍ゲ侍ま
渡を名るう国の紙ゆみ見を損世ゲ今人一寸も引ぞく
八浦といふゆ脳く漢士の数ま舎を見ゆ名ーの
老婆慰ゆ号を人ろびも数月を体あるゆ古の
家の雲ゆる漢すわそこなるい旅人長の接をひくて
歩ゆかなひくくていい最いく国きるゆ名ゆ中ゆくあり
洋中の湖へ夫地ゆいろる痛を
金すゆゆかいぎ我答る員て体ひゆさんと言

太左郎は大ゐに喜びゐの漢乃いゐゐまろせてやごて出港よ
りさまれるゐ濱迎ゐ有つる漢舟まさり乗てたるゐの沖ゐ
潜出せご徐ゐ濤濵濵底として巨濤逆浪のすさ
まじきゐるぞ列まれるごてぞよき沼ゐりとゐ太左ゐ
伯ゐゐくゐを海ゐ浸さんとする而をゐの漢艤をゐり
とってさんぐゐあすくゐり此時浪あゝく舟ゆらめき目眩
ゑき猿猴さゐぎまべ尚ゐ出てゐゐ右すくらる太左郎
勇力猛まま輕捷ゐ逢ゝ高ゐ出しゐ疼とゐ大敵ゐハ
かゐひゐくゐをむゐくゐ長ゝといて牙狀ゐ
せるごゐりなりゐの漢ハゐたぐ縄を切て太左郎を

ぐるくと貪ゐとゐゐて啊ゐと笑ていゐ長今伯を
海ゐ打出ぐ奥後小苑ゐらするゐまべ寇和のゐ
等ゐゐとゐ宮をべゝゐまえ来ゐの家ゐ寝ゐと
なり法ゐハ嬰ゐ十両ゐ金ゐを持ゐをえこと
いゐぞハ奪ゐんとのゐと計まどもゐ毛ゐを抜ざり
伯ゐごゐゐ合せゝこと奪ひ我嬰を縛ゝて金ゐ
我奪ゐ伯ゐが殺ゝて金ゐを盗ゐり逃ゐ出ゐて
ゐゝて伯ゐ嚴ハ海の底ゐ沈てゐまへバ誰ゐるゐの
家我ゐとも我物ゐ後日の災をなくこと
我命を全ふまる計畧なりいゐゐ番尾好機関

ゑ〜ずやといさめ奉れども聞ず剣あおぎてたちと踊りて
犬を哀れに側に親しき海のぞきてゆひるハ我今
ハ命のきはなれバ不相相の食を取て此奴を讒なび
食ふをてうど十面なれバ突まて命をとをけ
るもあんさまれバ我本是もむ〜うびの服ぶ
命をもすくふ色とゆひるがいやく此食ふハ人の
物かなりて文義を金鐵まるいまたの人参代
みさ用ひ色てまき〜就をえで色さる食ふなる
ふとして今その食ふまて命をるハ乃まあ〜ぞ
とにもかくみを不宜の末なりとあきらわ眼を閉て

叡慮をそなるみ氏御ろの漢そろくこと砕を伝て
犬を部がかゞの童石と色やゞて渦まく浪まざん
波とあさまを色へ無憍なりる浪身なり

○猫の仇

此時犬を部ハふ暑のそこよ流〜が鳴呼孝ん
天ふ感色海の底までも通ぐまんいぐ〜てろ縄切て
碎ハまづ〜骸ハそろ〜と波のよふ深く出さう夫をふ
元来水練ハ弱されども色この仇まつろんりの色と
八大総王勝ゑを奪て昆比羅大権現擁護の
力をそ〜させ給へ南無天帝通照金剛と

一人ふ乳よ長ゝて海くともなく浪よゆら道深川
流つゝて永思後や一ツ乃宿ゆゑ道乃るゞ
丈を良やうく波ゆ際まとひあゞゝていゝるゆ地ゞと
なるゆ日ゝ道東西もさだゝゆ孤ども迷ふ火乃
光の見やるを目あてゝて右ゆ側道左ゆ沼つゝて
道をゝゝ幸ゝ出ゝうつきて道べ茶門物宿を
構へく家義ゝて流ぐきてゝるその徴様いゞ道ゆ長
都の盛後と見へく一人の下僕ゝてすゝなるゆ大方
何とやす而ゝと問乃道バゝの下僕ゆ中ゝてゝ
武而ハ徴長寛川新のうち小豆嶋ゝてゝ道宿

なるゆ旅人いゝて世而ゆハ来ると発るゆゞ大方
小豆嶋と実ゝ大きゆ喜びゆる大家ゆたよりてこ
そ為ての舎ゝの主を暑出ゝよ役宜ゝ為ゝめとゝひ
乃道バ先日ゝ道ゆ見ゝゆを伝ゝ一夜の舎ゝを乞ゝ
乃ゝふゝの下僕ゝを為ゝてう歩ゞハゞ道ゞ大方ハ
児嶋衛乃発越ゝ伝ゝて乞ゝ敷き中乃道バゝの
下僕家の毒ゆ為ゝてゝ乃ゝるハ我家ハ年ごろ後家
持ゝて悲ふく難謝宿ゆどもなゝつゞいゝ
なるゝゆ後家師茶ゝ玉ごろんゝくゝなり
て形道北乃ゝゆ詞ゝゆ「のゞど」を乞ゝこの宿の

長者と敬まひ奴ら人ゐ一物のれを事をも嬉しがな
ゐ〳〵行者ゐどとぐゑ一服れ越しハかりゐ
そ且也〳〵ゐおそ宿しゐ〳〵と中さてゐく彩見ゐて
ゐ〳〵乃咽まで干なゐ〳〵を刀ハ業耀姿と好を
ゐつをゐゐ月ゐ嘆さち武引入〳〵豆疫病蔵
乃あいてと図空爰ハ番ゐ〳〵事ゐ元ち図舞踊
〳〵姫ゐゐこひと踊ゐあ且バそのまゐ且ゐ一
疫を咽させやべきゐいゐくゐても苦〳〵ゐずやと
ゐ〳〵氏時さ〳〵ゐ英雄も特ん作ゐ且をを〳〵一寸も
ゐ歩ゐ〳〵武冥ゐゐゐゐ〳〵〳〵ゐ大ゐ朝端

の下ゐなりと恵ませゐをを図〳〵ゐの下僕いき
さ〳〵ゐとを本を部武未弱反の内ゐいざゐひしゐ
藤人詩の界ゐ病つ且てゐ事ゐ盛図鶴茅乃
束ゐ〳〵免卒図いゐ〳〵くゐやと問ゐ大坂ゐり
と長ゐ且バゐの下僕を実〳〵大坂をきくを
帰〳〵やとて涙をを〳〵と流〳〵且バ大を良ゐ露図
何也〳〵大坂をさだゐおを且ゐぞやとゐゐの下
僕さる仔細あり行ゐて学世中図我元素さまでの
下籠ゐ〳〵ゐあ〳〵ず武蔵の守蔵也庫仕政
咽公ゐ仕〳〵さ図待さ図ゐ十五ゐ且仕花且人ゐ

依奉して大坂の五高町といふ所にて
沢屋伝兵衛の日本橋く用金十両を癸ひら
むる人を捜せどもかいなきゆえ用金の内五
べふ見のてハ何とやらん陵めぐく中沢も立ぐさく
既に切腹せでやと思ひしに百兵衛情厚く伝とく
聴とぬすうさて我七より氏家の下紐とり川
年ゝ多猿狐弦弥しさ免いうよ田て主恩の金ゝ
を償でやとゝ人ゝとうく多病おつぢきて難用ゝく
薪炭の若ゝもむゝく見ぶゝ十兵の金ゝ個ゝ
今ゝ本意を変せすと首をゝおて後ゝ大を部

姫猪弦きくゝ亡父の作り置きしゝ玉ゝ心しと
寿合しゝ見べさてハ代人を義父ゝ紙屑をうゝし
若侍ゝりゝるゝと大ゝ喜び伝の案ゝき新しく
何ゝても後機ハゝ思ゝやと問ゝゝの下僕後拠
とてハゝ見ゝ見ゝどもその世ゝ上色の反古ゝ白人乃
自筆ゝて僕見室川郷小豆沢と書つゝあゝし
とゝ人大を部屋ゝ見べを出ていゝくゝの類ゝ見ゝで
代財腹中ゝう侍の十兵の金ゝを元出して元ゝと
とゝゝゝゝの下僕金ゝを元て上色を元ゝ白人
の自筆ゝまぎれなゝう見べ出ゝ代て十五

年の間その節乃人色のまゝてくい有しとて
ものゝ果てなく不憫をなす時ゝ犬を郎十五年
以前又乃阪名古屋町まて紙屑を買る中より
此食ふを拾ひ出し隠殺のきはまでも不忘とせず
又ゝ遣ものゝ年月食ふの主弱めぐるを
つゝさふ語をおし伴の食ふを奪ふ内の下僕
さに喜びずして食ふへ乞ずして倩ず只阪名親ふ
厚志のかゝ感ずるあるをとゝ只管
涙をゝし一礼をなしたゝ世ゝとなりく食ふへ
辞退しといふく受ざるべ犬を郎不忍して

るへきある時へ亡父阪名ゝ信節をさゝ子ゝ自
ふを世ひもなく我も親の遺ものゝ背きゝ人乃
室をあづりて何の益ゝあんとて歎息なりゝ是ハ
ゝ下僕家のゝくゝさまでのゝてゝ世をむな
きくゝもへあぎれども一旦我屋敷まて来ひる
食ふと十五年の星霜を経て胡乱ゝ元をとゝす
いと是世ゝ為ゝ親ふへ実ゝ世に稀し元
義士者ふの人ゝ是ハ事の由武士庫乃厳ゝ行く
りづ是にも裁判ゝ実ゝ飢ゝ人ゝ元
とてその者出さゝ世ゝが頃制ありて食物を推乃来り

とくれをきいて世んと思ひしかど我家ハ春すて
ハ下ざるの食物をもそなへあこねるとて
豎とを結てあるゆゑ此ゆゑ此小豆俵ハ小豆のみをく
して皆ゆ小豆のみを粥にして小豆粥を
我父家の種とそいぐなるとまいくするなりとて
一椀の小豆粥とあさ明日ゆくと語るゝしたや
ゆをもとして出さりぬ犬を良氏附まゞ肌ゆ
く繰るゆるべうの下僕の志をかゝぶ事ゆしと
仲の小豆粥を食しるゆ百味の欲食を
いざきゝぶ氏小豆の味ひ美なるゆまことゆ天の

其家とつゝとかくハ有まじきとぞ覺るゆ
氏小豆粥食ゆるゆ何となく惣身ゆるやゆ
なりて苦しき氏忘れんもやゆなる折しもあれ
外面ゆ人のそのゞる家ゆ行車やんと戸のすき
まゆとうゞひゆれバ黒白の犬二隻のみありてあるゆ
人ゆ家ゆあゞ氏黒犬人の言葉乃ゞくまてゆるハ
白ゆ今伊ゞ家の奥義ゆ逆人ゆ忍びハう伊ゞとて
吼ゆ知ゝせざるゞとつゝ一隻ハ白犬ゆ人のゞとゞまて
そのいくるハ黒ゆとつゝ吠ゆれハ氏家の門前
まゆかるゆれどあるゞ氏喫貪るゆて奥の骨ゆら

あさへずいさてう胸其位置尊を忘れ足べ走るる及
ずとては二度の犬乃声諸る人のさてやくぞふ
く犬を庭が耳まりくと出と臣うべ我なぐ
奇異希有のおひを見て恐ひめそする我幼
稚のみぎ足犬乃乳汁とのまてく生長なしされど
自然と犬の精血をうまつぎ今犬のエだ我
実足臣う掬を又小豆を食咽をうるとも空
志く年月うまいる犬襲急まきえてん神胡
ゐ足を足金く縫ふなり並る平愈なる
不忠俄さまそ足犬ハ陽歟みてなること孰し

小豆へ犬の良薬まて孰我き急すとはつるが今
立地小知能を足ゆるるこ足ゆと天の祐る
而まして家力平生ふまきを足れば今まてもあ
足敵ゐ出合せべ急ゐを見せんずるいとやをしと
踊足あぐて歓ひるさて賢人をすてあくべきゐ
あ〜ぐとひそうる厨まいうてうの下僕ゐ若さ〜せ
ゐ足急ぎ家内の者を集めて救人要義ゐいさを
てゐるゐそや賢人足へぎ足べりかん足ゐるるゐや
と天井あるいへ様れ下我るん生をなくまつ臣こと
捜しまそや跳さ足と思るこいを験所こと祈足ひ

体等ハ眼のうへに奴豆腐の
ようなるものをねりとりくつたる
梁のごとく大の漢鼾をかき
大勢あるとさわりてうるる小角を縛あるべきの
賢医人を去りてらんやうにて
行ずず眼喝してさるぎあるすとるまつぞして
の色々と来りつる医者さのようにやがて我角
科をなすびを是まで未給医ハ揚条出けよあり
ふ此よりやうき者をりの医ぞさるべ又一歇成
りうへすびとて即空しきの内ハへる是ハ家人ハ

医人を引立て未給医の内ハつ是ハ拉ハ郷ハ
つまて出さりぬ此附大を良ハ未給やの内とり出
なく医園の中にあり是うぞと此医人の而あり
と是へ法るよ是今日去づあるの医体の漢角是
べ体日是を是去るやとてをうるハ此医人大
ハ警医門身よくうる馬嚢の中ハて眼角是
ものやと不塞す体もハいじて眼是ハ是で
こそ我而をうるやとハ大を部ハ問衛是医
人くるき息の中よりも我ハく代衣の中乃角と成
されバ命のきはに何をうつ生ん罪障懺悔の為

弦巻きさんは元来鼠の妖術を使ひて悪害
の中よりあいてを眼光をきとりてうえぎるるの夜
盜ふ妖怪を始し鼠を活とかの我家十五ヶ夜以来の大坂
五条町ますひるがひるが牡丹屋の附る硯雲乃
毒気を去ること阪女とらつるものを殺害し十夜の
食ふを奪とるべき好計家を亡く大坂とび新
をうしてる事ハ四九日資絨をせ
ざる不をなく俄和の児俗る事ハ海士の婆
が金持ちるをうんこを俗ハて婆が害るとなりぬ
るなり今日ハ身を海るをづわ東を計ふと也

法ることハ折あしくく人ふ足とがやを足自をむな
去く仕俗ふ足ふ大金を盜ふんと此家の義ふ
悪びハ鼠の術を以ゆへ教主のもの我ハ足ふ事
なさりて不ハ主乃婆ハ足を足也脇つけるを乃
附ハ怖しさ瞳の光を射るがごく足一宿を
ふりて梁ふ毒ふ為ず覚ぞふらおとされふり
猫ふ鼠のあふごく喩ふひときハ事さよそを
鼠の妖術とふハふくく人の眼を口をむ足ざるふ
猫の眼を掩ひがを足ハ開の術ハよりく
夜来不覚をきざ足ハとが術を折ふの婆を

よと人間みてハあるべうべきまさきく変化魔
性乃たをひゑんさるまてもヒとよりゑ妖怪
我ヒ〳〵ついに命を果すなヒとてさしとの強盗
と首を授てうるを犬を良一を突ていざ事ゑるゑ
ヒヒとハヒヒ伝が今中世阪外が一ゑ犬を所なり
伝よく我親を害せんヒヒとをも又きつわる怨
うるよゑ伝さゑぐの恩ゑを返ヒ敵貴の恩賞ゑ
交ヒバ我母を殺害ゑるる敵のもゑ恨をきうゑ
あんすやるゆべしとて刀我しうて出ゑちゑ
ヒうくをヒと出すゆる盗人ハ形ヒて去ぐく

待ゑくヒヒんづきてる事あり命をこそ事ゑつぐ待り
中さんとゑゑ犬を所去ぐくを逃て日ヒ昼をる
ゑ前漢書ゑ恐我報ずる恩を以厚く薄望ゑ施す
とらくるゑあり老ゑ經法花珠林鶴林玉露をのヒ
世教るゑ恐を報ずるゑ恩を以ることゑ徳の一ゑヒ
べきゑひとりてゆるをゑとあんん我父伝ゑ毒害ゑる
おさんとしてまねうヒヒゑも法中ゑ況てさそう伝害
母を殺さんとしてさくヒヒをあうて害せず其刑を身を
害せざるゑヒべ今我母の敵をさく若きバ一命を
ゑをく逃とゑるの賢人愛をひそそ心やうヒヒ

十五夜以前の身の母接死のみぎり死骸を見る
物凄き嵐ありて喉を噬こと甚しかりしが
なんぞ人のかくころを家あるんと喉しきまりなる
まぶろ家の胴まとる三毛猫ありそ日より行方をそ
見まとるおいて但捐を観まどるの伴の猫へ通ず
双猫まとて乃身の母をかくこと世るをさとりこと今宵
此家の賊をとるの伴の三毛猫れ不変まて乃身の
母の敵とつハをるぞと知るを使とを見て大きう
勢怒して怒を發し眷をみぎて嵐をくいたぶり
さてハ我母の敵ハ人まもあらぬる胴の畜生なり使る

におしさよげしまこと猫ハ魔性まて仏性なきう
ゆへ釈尊涅槃の時母牧乃徒れ禽獣乃大禽乃
中にを猫の一種ハ除まとりれとへいろる変化魔王
とりこもなるこそ人こ出ふ身体をとを見て未練
成成立出そる眞嵐まとのいこ事まて業姫のみより望成
の内成親きえまべいまぐ酒宴の宴中まそさまぎ
ねこ犬を良服を定てつるぐえまべいまいる
主乃嘆とまとハいま五尺ある乃大猫まとてハ
づまこと乃孫乃猫まること数十隻ま乃親乃
の乃拭をいぐぎ三筋の尾をとるまをきき拍子成とまて

踊りとこるいねうち犬を命ぜられて大ゐあきれ
ものとなるぶさるとても生ハうくる変化なりともいまゞ家
内ハとの知ぐるや我ハ是犬の精眼ある狗猫乃
不変ぞうん知ぐるとなるとういで畜生あゝ目さ色
こゝとんと長船の一刀をぬきて色黒きの内る踊り
ハに方ハ方ハ雑を切たゝひ見べ数この猫ども呂
る式貪て吼咪びに方ゐぞうとふぎちうこ附
うの犬猫眼鏡きて百弥の徒乃どくこゝろとひゝ
きゝにハ耳のねまで刻て猫虎のどき牙と利き
我ハこゝ是来仏が来ゐる阿ゐ仏が扨と喰殺せ

しゐ仏とゝ又我餓食と家ゐ来ゐるとゝ吼さけゝ
て飛ゝる犬ゐ是式使ていゐくいゝ金剛神の勢
ひとなて おてゝこゝ是バゝの猫まゝハ夜叉羅刹鬼の
あゝこゝるゞどく吼こゝて さゞ一抓と飛ばく而式
ゐるこゝりとゝやゐ毛ゐ犬ゐ ゐゞんど切さ虎ゞ猫まゝ
腰ゝゝ下を切たゝさ是一数あゝと咪びゝゞ猫熱
迚て家鳴震動ゐ餓ひ大雨ゐゝきゝゝ一むゝ乃
黒雲霧下るとゐ犬ゞ犬を命ゞ髪と法ゝんでい
ゝゝゝ引ゐゞんとゝす犬を良ハ猫まゝゞ脱とゝて引出
ゝさんとゝゝゝゐひゞ金剛ゞ知てついゐゝとて おさく

むなもとより三刀まで刺ぬきはなつべ猫まつ雷のごとくうごくおわき咲て死るハ姉しゐんとゝいふ猫なりける歟勢なり犬を良家内ハ者とあつかて様の下をあつかうるゆまきたく此家のあゝ老女が死髑髏出るとゝ家内のもの乃ハ之の敵なりと猫まつをすを捕とゞめ殺せり

そもく此小夏猫ハ東西九里余の地ゝて古今ゝ稀ゝ敵討ゝ犬をふゞ現名一日のうちゝ多くの蔵地云庫ゝの穂ゝ遠し犬をふゞ義勇猛毛青吳の事ゝて長者の紙堂家中きとゝ詰ゝ

縁ゝ有ゝ犬を郎忽ち一日のうちゝ大獲長者の身ゝとゝ成ゝ之の本を之ゝ求ゝ世ゝ十歳の今ゝ成ゝ迎ゝ有ゝ云庫ゝ以完物ゝ仔細ゝ宝ゝ詰ゝ感ゝ武士ゝ紀陽ゝ名ゝ中ゝ居ゝて匹夫ゝ之ゝ仁義ハ武士ゝ和ゝ所ゝ以ゝ武門の勢ゝ成ゝ犬を良ハ是ゝ之ゝ犬乃潜園ゝ有ゝ犬ゝ成ゝの犬乃猴を改藝ゝ傷ゝ孤ゝ成ゝ先祖の名ゝ為ゝ吊ゝ傷ゝ之ゝ犬ゝ成ゝ波の海中ゝ沈ゝ成ゝ之ゝ成ゝ今ゝ之ゝ石ゝ出ゝ之ゝ似ゝ石今ゝ出ゝ之ゝ

死罪一等をゆるして一ヶ所へ流し置きしが
日数経て誠死をゆるされ信濃国中にある時は嵐の
厩なるゆえ嵐福と名づけ夫信濃王義て今まあり
さるかぞふ八角犬を命正昭と名のりて伊賀九郎
英名をあらはし兼也大友合戦の時数度の誉を
をあらはしを身生涯ゆるうして子孫繁昌なり
るをひとへに犬を良ぶ孝心天乃祐
とぞなり 化

敵討猫魔屋鋪大尾

跋

数部大巻所世乃中年云川きき
足ら為一冊物獣乃仇討忠孝あり
人さしてゆかなうん八たこうぶ
版本きゝび中信ふとも覽玉ゆて
作者ねこまの中将ふぐ猫ち
妻乞蓋るゝやと云云

文化五年春正月

振鷺亭主人著

蹄齋北馬画

東武

通油町　村田屋治良兵衛

書肆

日本橋新右衛門町　上總屋忠助

戊辰新版　慶賀堂藏

巷談坡隄庵　曲亭馬琴著　中本三冊

復讐猫股屋敷　振鷺亭主人著　仝　一冊

函嶺復讐談　感和亭鬼武著　仝　二冊

繡像小説　宿直物語　式亭三馬著　全部六冊

孝子美談　白鷺塚　十返舍一九著　前後四冊

敵討枕石夜話　曲亭馬琴著　中本二冊

古今奇談 紫草紙 全五冊

國字怪談 瞬艸帋 全五冊

小野蕙噓字畫 全

復讐浪速梅 全三冊

三國一夜物語 全五冊

圃老談 菟道園 全五冊

戲場訓蒙冨會 全五冊

風声夜話 翁丸物語 全二冊

古實今物語 全六冊

自来也物語 前五冊 後五冊